

#FenderNewspaper

Vol.7
Spring
2021

tricot / FIVE NEW OLD / yourness
the peggies / NECRY TALKIE
Hitsujibungaku / FAITH
Saucy Dog / INORAN

Hisako Tabuchi / DISH// / COOKIE!
go!go!vanillas / TENDRE / MIYAVI
TOKIE / Takashi Kato / Arisa Ushimaru
TOMOMI / Kazumasa Tanaka

Haruka Kudo / Nakashima
Hattori / Ryunosuke Yamagishi
Ryuichi Kawamura
and more...

Fender NEWS



Cover
Kenta Kataoka
sumika



Fender®

NO LIMITS

MADE IN JAPAN HYBRID II

フェンダーの進化をその手に



Fender MUSTANG™ MICRO

場所を選ばないポケットサイズの超小型アンプ。

©2023 Fender Music, Inc. All Rights Reserved. Photo: Yusaku Kuroki

06 Cover Artist
片岡健太
sumika

10 tricot
FIVE NEW OLD
11 ユアネス
the peggies
12 ネクライトーキー
羊文学
13 FAITH
Saucy Dog

Evolving Dreams

Unlimited Expression

14 INORAN LUNA SEA
15 田渕ひさ子 NUMBER GIRL / toddle

16 DISH//
18 くっきー!
19 go!go!vanillas
20 TENDRE

Cover Artist Archives

Special Interview

21 MIYAVI

22 TOKIE
23 加藤隆志 東京スカパラダイスオーケストラ
24 牛丸ありさ yonige
25 TOMOMI SCANDAL

The One. For All.

Life with Fender

26 田中和将 GRAPEVINE / 工藤晴香
27 ナカシマ おいしくメロンパン / はっとり マカロニえんぴつ

28 Mustang Micro

Meets
Fender Mustang Micro

29 山岸竜之介

The Rock Freaks

30 河村隆一

31 Information

#FenderNewspaperとは

フェンダーのオンラインメディア「#FenderNews」が年2回発行するフリーペーパー。数々の人気記事の中から厳選したコンテンツを1冊にした永久保存版。ページ内のQRコードからアクセスすると、オンラインメディア「#FenderNews」上でより詳しい内容をご覧いただけます。

#CoverArtist

片岡健太

sumika



Photographs by Erina Fujiwara

2ndアルバム『Chime』以来、約2年ぶりとなるニューアルバム『AMUSIC』を3月3日にリリースしたsumika。
“さまざまな人にとってのsumika(住処)のような場所になってほしい”をコンセプトに、音楽と真摯に
向き合いながら、聴き手にそっと寄り添うような良質な楽曲群で、世代を超えたリスナーから絶大な支持を得ている。
そんなsumikaから、ヴォーカル&ギターの片岡健太がFenderNewsの表紙&巻頭インタビューに登場。
音楽を始めるきっかけや、彼の愛機であるJazzmasterの魅力、フェンダーについて話を聞いた。



#CoverArtist
Kenta Kataoka



ここで変わらないのなら 人生はこのままかもしれない

——片岡さんはどのような環境で音楽を始めたのですか？

片岡 中学校が神奈川県で有数の体育学校だったのですが、小学校6年生の時に複雑骨折をしてしまい、全治2年くらいの怪我を負ったんです。そのため、体育学校に入ったものの運動部や体育会系に馴染めなくて、部活動をサボって逃げ

るように音楽を始めました。家でギターを弾いて、馴染めない集団と一緒にバンドを組んだんです。——挫折から始まったんですね。多くの楽器がある中でなぜギターを？

片岡 父親がもともとギターを弾いていたのですが、小学校4年生の時に父親が”久々にギターを弾くか”と言ってギターを買ってきて、それがきっかけで弾くようになりました。アコギはちょっとだけ弾ける状態で中学校に入って、どっぷりギターに浸かったのがその中学校の挫折からです。

——バンドを組む前は1人で弾き語りを？

片岡 はい。それこそゆずさんとカスピッツさんとか、初心者でも弾ける曲を歌本を買ってきて弾くことが多かったです。練習は完全に独学ですね。わからないところは父親に聞きながら弾いていました。

——あまり挫折はなく？

片岡 F（パレーコード）の壁にぶち当たりました。最初はアコギだったので、弾きづらくて”弾けないや”と諦めかけていた期間があったんです。でも、怪我をして家にいるしかない時に、久しぶりにアコギに

触れたら難なくFが弾けて。小4で初めてギターを触って、小6の時に怪我をしたので、2年間のうちに手も大きくなって弾けるようになっていたんです。中学校に上がるタイミングでエレキギターを買うのですが、エレキを弾いたらめちゃくちゃ弾きやすくて。”あれ？アコギにはない弾きやすさだな”と思って余計にのめり込みましたね。

——エレキを買ったタイミングでバンドを組んだのですか？

片岡 いえ、1年間くらいはバンドを組んでいなく

て、まだ地下で活動をしていました(笑)。

——バンドを始めるきっかけは？

片岡 中学校の時の友達が銭湯の息子で、家に離れがあって、そこにその友達のお兄ちゃんがやっているバンドの機材が置いてあったんです。ベースとか小さいドラムセットがあって、いいなと思って。部活動をサボっている、いわゆる学校に馴染めない軍団がちょうど4人いたので、みんなで楽器に触れてみようよ”これ、みんなで弾いたほうがいいんじゃない？”って、自然な流れでバンドを始めました。

——青春映画みたいですね。バンドでのライブは？

片岡 中学校3年生の最後のお別れ会に、漫才をしたり先生のモノマネをしたり、出し物をやる習慣があったんです。その中で先生バンドや、サッカーや野球といった花形スポーツ部員が、引退したあとに集まってバンド演奏を披露する風習があって。その枠が余っていたので、立候補して出演したのが初めてのライブです。

——バンド的にはかなりの大舞台ですね。

片岡 そうです。でもお別れ会なので、ライブをして失敗しても”二度と会わなければ大丈夫だろう”みたいな開き直りがあって(笑)。じゃあ、ここで一発やってみようかと。逆にここで変わらないのなら、自分の人生はこのままかもしれないと思い、意を決してお別れ会の立候補で手を挙げました。

限界の向こう側に行くギアが 自分の中に新しく生まれた瞬間

——今思うと、そのライブが転機？

片岡 完全にそうです。”片岡君って何をやっている人なんだろう？”って、中学校3年間はずっとみんなに思われていたと思うんです。体育学校なので、運動しない僕は”謎の人”で。そのお別れ会のライブの時に、”片岡君って3年間音楽をやっていたんだ”って初めてアイデンティティを認めてもらえたんです。自分の評価が180度変わる瞬間をライブで味

わったので、その感動をいまだに追い求めてライブやバンド活動をしている部分があります。

——良い話ですね。

片岡 今は美談として語っていますが…当時はツライが95%くらいでした(笑)。居場所がないというか、ライブをやるまでは音楽をやっていること自体が罪だと思っていて。みんなが部活動を頑張っている中で、”ギターを弾いていいのかな？”と罪悪感すらあったんです。でも、ライブをしたことで報われて、アウトプットすることは大事だと知れた瞬間でしたね。

——そのライブの評判は？

片岡 めちゃくちゃ良かったです。それこそ、スター集団たちよりも盛り上がり。スター集団って部活動を引退してから何となくギターを始めている人たちで、練習期間が3〜4か月くらいなんです。僕は2年くらいやっているので、圧倒的な演奏力の差を見せつけて”下克上だ！”って(笑)。しかも、出演順はスター集団が先で、僕らはジャンケンで負けてりだったんです。まさに消化試合、観るのも面倒臭いな…という空気だったのですが、一発逆転でした。

——そこでプロになろうという気持ちが芽生えて？

片岡 そこまでは思っていないです。でも、ちゃんとバンドをやりたいな、高校に行ってもバンドを続けたいなと気持ちが固まった瞬間でした。

——フェンダーとの出会いはいつですか？

片岡 最初に弾いたエレキギターがフェンダーのTelecasterで、友達に借りたものです。アンプに接続して弾いたことがなかったので、アンプにつないで弾いた時、聴いたことのない音量で鳴るから”これはとんでもない物を手にしてしまった！”と(笑)。自転車から初めて原付に乗った時、”速い！”と思う感覚と感動が、アンプにつないだ時にもありましたね。そして、自分の力だけでは行き着かない、限界の向こう側に行くギアが自分の中に新しく生まれた瞬間でした。それが僕にとってのエレキギターでしたし、Telecasterだったんです。

——それからフェンダーのギターに触れていただいていますか？フェンダーギターの印象は？

片岡 フェンダーは、僕の中で”スナイパー”のイメージがあります。狙った音が作れる楽器だと思っているんですね。例えば、ピアノや同期などが流れている中、ギターの帯域はこしかにいて時に、その帯域を狙って音を作れるのがフェンダーです。しかも、その精度がものすごく正確。sumikaは音をたくさん重ねて作るバンドなので、コーラスワークやピアノ、ストリングスといった生の良さを生かしながら、エレキの要素やロックな印象を残したい時、いかに精度良く作れるかが作品のクオリティを左右するんです。フェンダーは、そこを正確に狙い撃ちできる。まるで、スナイパーみたいに。その点はすごく信頼しているから、フェンダーのギターを持っていけば大丈夫だろうって。実際、レコーディングやゲネプロができない現場でもすごく助かっています。

Jazzmasterは、自分の心に いつも衝撃を与えてくれる

——片岡さんはJazzmasterをメインで使っていますが、なぜJazzmasterを？

片岡 ちよっとよこしまかもしれないけれど、シェイプが好きなんです。ギターを弾きながら歌うので、弾きながら歌っている時の気持ち良さってすごく大事だと思っていて。肩から下げてギターを鳴らした時に、どうい声が出るのか。自分の体の波長と合うギターが第一なんです。ボディの厚みも含めて、Jazzmasterはそれがピッタリなんです。ボディの厚みもそんなにないけれど、音を太く出した時は太く出せるし、ロックな音が欲しい時にピックアップ（ポジション）を替えるだけでいきなりキャラクターが変わる。ずっとフロントピックアップで弾いていたけど、ライブ中でも制作の場でも、リアピックアップで弾いた時に、良い意味で想像していない方向へと心を変化させてくれるから好きなんです。

——アーティストとしての衝動に応えてくれる振幅があると。

片岡 そうですね。Jazzmasterと対バンしている感覚です(笑)。もちろん、使っているアンプやエフェクターによって音も変わりますし、それが想像できない方向に転がってくれるから楽しいんです。”お前がそっちに行くなら俺も行くよ”って、逆の方向に行くこともできる。そういった意味でJazzmasterは、自分の心にいつも衝撃を与えてくれるギターですね。あと、名前の通りもとはジャズギターとして作られたと聞いたのですが、ロック系のアーティストがこぞって使っている。意図していない方向に転がっているのが、名前からも感じられるのがいいなって。——sumikaに出会って楽器を始め人もたくさんいると思いますが、最後にビギナーへメッセージをお願いします。

片岡 楽しんで弾くことです。誰かにやらされているわけではないし、楽器って楽しいものだから、楽しんで弾くことが一番だと思います。”1週間以内にFコードが弾けなかったらギターをやめる”みたいな宣言は絶対にしないほうがいいです。楽しんでいる人が一番強い。他のアーティストと対バンした時や、フェスで他のアーティストのステージを観てもみんな楽しんでるから、大志を抱いていようが、まいが、どちらにしても楽しんで弾くことが大事です。sumikaは難しい曲が多いですが…「ソーダ」はカポをつけると簡単に弾けると思っています。パレーコードも少ないので、ぜひ楽しんでコピーしてみてください。

かたおか けんた
神奈川県川崎市出身。sumikaのメンバーは、片岡健太 (Vo.Gt)、荒井智之 (Dr.Cho)、黒田隼之介 (St.Cho)、小川貴之 (Kb.Cho)。2013年5月に結成。アコースティック編成の”sumika [camp session]”としても活動を展開。2014年11月、初の全国流通音源ミニアルバム「I co Y」をリリース。2018年6月、日本武道館3daysをソールドアウトさせて大成功を収める。9月に公開された劇場アニメ「君の隣をたべたい」では、オープニングテーマ・劇中歌・主題歌を担当。2020年9月、自身初のオンラインライブ (Little Crown 2020) を木下サーカス立川会場から開催。



#EvolvingDreams

tricot

新たな時代を切り開く若きアーティストたち。
音楽シーンを彩っていくであろう表現者たちからのメッセージを
セッションを交えながらお届けするコンテンツ「Evolving Dreams」。

「10年間バンドをやっているいると弾いてきたと思うんですけど、まだ自分には伸び代があると思っているので、そこを伸ばしていきたいなと思っています」ヒロミ・ヒロヒロ



「夢というか、音楽をやる上でいつも思っていることなんですけど…私は未だにギターも下手やし、歌も下手なんです。生まれ持って与えられた才能が小さくても、それをできるだけ大きくして、一人でも多くの人の人生に楽しい時間を与えられる存在になりたいなと思っています」中嶋イッキュウ



「10年以上ギターを弾いているんですけど、まだ自分が出したことの無い音を楽しんで探していきたいと思っています。まだ鳴らせてない音への探求、あくまでもギターで、ギターっぽくない音でもギターで出していきたい」キダ モチヲ

トリコ
2010年9月1日、中嶋イッキュウ (Vo.Gt.)、
キダモチヲ (Gt.Cho.)、
ヒロミ・ヒロヒロ (Ba.Cho) とともに結成。
<https://tricot-official.jp>

#EvolvingDreams

ユアネス

「楽器のプレイヤーだったら、外国語が話せなくても楽器を通じて海外のミュージシャンと一緒に演奏することもできる。つまり、楽器を演奏できるってひとつの言語を獲得したようなものだと思うので、それを最大限に活用して人の役に立ちたいと思います」田中雄大



「音楽をやってこなければこんなにたくさんの人とも会えなかったし、今いる場所にも絶対に来られなかったと思います。コロナ禍になり、人との接触を遮断された上で自分の限界がすごくわかって、それを助けてくれるのは身近な人だと感じられたので、もっと人と積極的に関わって多くの人に求められたいなと思いました」黒川侑司



「ユアネスというバンドをもっともっと日本中に広げていきたいけど、楽曲を作る身として、海外の人にも届けたいと思っています。今まではずっとバンドを続けていくことが目標でしたが、世界を見たいという夢が僕の中で大きくなってきました。そのために、いろいろな方々とコラボをしたり楽曲提供できるように勉強して、ここ2〜3年で力をつけて30歳前には実現したいです」古閑翔平

ユアネス
福岡で結成された4人組ロックバンド。
メンバーは、黒川侑司 (Vo.Gt.)、古閑翔平 (Gt.)、
田中雄大 (Ba.)、小野貴寛 (Dr.)。
<https://youness.jp>



#EvolvingDreams



#EvolvingDreams

FIVE NEW OLD

「最近、すべてが“ベースという楽器に出会ったから”だと思っていて。これからは、ベースに真摯に向き合いながら弾くことが重要なんだと感じています。音楽は続けられるだけ続けていきたいし、ベースは一生弾いているんだろうなって。そして、その未来は楽しいだろうなと思っています」SHUN



「できるだけ長く4人で音を出し続けることが、バンドとして変わらない夢です。バンドもどんどんブラッシュアップされていくので、2021年はひとつ大きな形として残したいですね。ライブの中ではギターを持たない時間も増えているのですが、最大限フィジカルを使って自分を表現する中で、あらためてギターと真摯に向き合いたいというマインドが芽生えています。というのも、表現者として、一番の理想は動かずして人を魅了することだから。ギターを弾きながらだと、明らかに動きが制限されてしまう。でも、その中で人を説得して魅了して感動させるところに、次のステップがあると思っています」HIROSHI



「ギターを弾くことで、みんなと分かち合えるプレイができるようになりたいです。言葉で伝えることもすごく大事ですけど、音で伝わることで絶対にあると思っていて。それは言葉にできないけれど、音楽で絶対に届けられると思うので、僕はそれをちゃんと届けられるようなプレイヤーになりたいと思っています」WATARU



ファイブ・ニュー・オールド
2010年、兵庫県神戸市にて結成。
メンバーは、HIROSHI (Vo.Gt.)、
WATARU (Gt.Kb.)、SHUN (Ba.)、
HAYATO (Dr.)。
<https://fivenewold.com>

#EvolvingDreams

the peggies

「昔からずっとこの3人で一緒にバンドをやりたいという気持ちがあるんです。3人が同じ方向を向いて、同じ歩幅で進み続けることはかなり大変だと思うけれど、この3人でずっと仲良くやっていきたいです」石渡マキコ



「大成とか評価ももちろん大事ですけど、何より続けてこられたのは“音楽が好き”という気持ちがあつてこそなので、それを失くさず3人が音楽を好きのまま生涯を過ごせたらいいなって。ミュージシャンとしては、自分が幸せだと思う瞬間があるべく多く訪れたいいな。あと、私がきっかけでギターを始めてくれたり、誰かが音楽が好きになる、興味を持つ、そんな存在になれたらなと思います」北澤ゆうほ



ザ・ペギーズ
北澤ゆうほ (Vo.Gt.)、石渡マキコ (Ba.)、大貫みく (Dr.)
からなる3人組ガールズバンド。
<https://thepeggies.jp>

#EvolvingDreams

ネクライトーキー

「バンドは続けていきたいです。ずっと楽しいことを生きていきたいので。音楽をして、それで稼いでいけたらこんなに最高なことはないので。そうなれるように、しっかり地に足を着けるようなベースを弾いていくのが目標です」藤田



「もう音楽を辞めてもいい」と思えるくらい、最高のアルバムを作ってみたいです」もっさ

「上手いギタリストよりも、フレーズが良いギタリストになったら幸せだなと思います。"上手い!"だけじゃなくて、あるべきところにあるフレーズ、欲しいところに良いフレーズを入れられるギタリストになったら理想だけど、難しいなと思いながらギターを弾いています(笑)」朝日



ネクライトーキー
2017年結成。メンバーは、中村都香(Kb)、もっさ(Vo,Gt)、藤田(Ba)、朝日(Gt)、カスマタケイ(Dr)。
<https://necrytokie.jp>

#EvolvingDreams

FAITH

「身近な人から海外の人まで、たくさんの人に届けられるようなカッコいい音楽を作り続けるのがバンドとしての目標です。それと、自分のスタイルというが"荒井藤子"をもっと好きになりたいなど思っていて、ひとつひとつの音で荒井



藤子らしさを今後も探し続けていきたいので、自分のことを大事にしていきたいです」荒井藤子

フェイス
長野県伊那市発の男女4人組バンド。メンバーは、Akari Dritschler[アカリドリチュラー](Vo)、ヤジマレイ(Gt,Vo)、レイキャスナー(Gt,Vo)、荒井藤子(Ba)。
<https://www.office-augusta.com/faith>

「バンドとしては、世界に羽ばたいて多くの人に愛されたい、その中で唯一無二さをアーティストとしても個人としても確立したいです」ヤジマレイ

「海外進出を夢に活動している中で、世界中の誰が聴いても好きと言ってもらえるような曲作りや音作りをしたい。それがバンドとしての夢です。プレイヤーとしての夢は、テクニックの向上はもちろんですが、ただ上手いだけでなく"レイキャスナー色"があるサウンドを確立したいですね」レイキャスナー



#EvolvingDreams



#EvolvingDreams

羊文学

「私たちの作った曲が思い出の一部とどうか、それを聴くとその時の感情や気持ちがあふくような曲で素敵に思っていて。そういう音楽を作っていきたいですね」河西ゆりか



「いつか外国で生活してみたいです。だから、海外でも演奏したいですね。世界中の大きなフェスにも出たいです。あとは80歳まで続ける！」塩塚モエカ



ひつじぶんがく
塩塚モエカ(Vo,Gt)、河西ゆりか(Ba)、フクダヒロア(Dr)からなるオルタナティブロックバンド。
<https://www.hitsujibungaku.info>

#EvolvingDreams

Saucy Dog

「昔も今も憧れている人がいて、その人を見て夢を持ってやってきたので、そんな人に僕もなりたいたいです。誰かの人生を変えられるような、自分と同じ気持ちになれるようなことをしたいですね」秋澤和貴



「事務所に入る前からずっと言っていることがあって、それが全国アリーナツアー2days即完できるようなバンドになることで、今も一番大きな目標なんです」石原慎也



サウシードッグ
2013年結成。メンバーは石原慎也(Vo,Gt)、秋澤和貴(Ba)、せとゆいか(Dr)。
<https://saucydog.jp>

#UnlimitedExpression

INORAN

LUNA SEA

フェンダーが提案する新機軸のギター
“American Acoustasonic”シリーズに秘められた
無限の可能性にフォーカスする
「UNLIMITED EXPRESSION」。

Photograph by Yuuki Igarashi

#UnlimitedExpression
INORAN



音だけではなく、行動範囲も自由になれる

——American Acoustasonic Jazzmasterを試奏していただきましたが、アコースティックでの音色はいかがでしたか？

INORAN 鳴りがすごく良かったです。アコースティックギターって、例えばレコーディングだとマイク1本で録ることが多くて、その場合は鳴りもすごく良いんです。でもステージで使う場合、ライブハウスやアリーナクラスの会場でもそうですが、D.I.(ダイレクトボックス)を通してベースとかのふりや、ハウリング対策でシミュレーターなどをかまします。僕もそうしているのですが、そういうものが要らないですね。ギター自体でそういう音にカスタマイズできるので、そこはすごく研究されているなど。

——まさにそれを目指している楽器なんです。ペダルを使わなくても、これ1本で何でもできてしまうという。

INORAN これ1本でツアーを廻れるし、旅をしながらライブハウスでも旅先の居酒屋さんでもどこでも弾ける。音だけではなく、行動範囲も自由になれますね。

——American Acoustasonic Jazzmasterはピックアップをハムバッカーにしたり、構造面でも改良が進んでいます。

INORAN やっぱりシングルコイルとは違う音ですよ。その違いが一番力を発揮するのがセッションの時だと思うんです。ハムバッカーは、他の人とセッションをした時に音が馴染むと思う。だから、調和が加わった感じですね。音楽って楽器単体の音ではなく、音と音が交わっている部分が音楽だったりするんです。会話もそうですよね？ 大切なのは間ですから、言葉ではなく“言葉の間”です。そういうものがハムバッカーはすごく優れているので、American Acoustasonic Jazzmasterで誰かと一緒に音を出すのが楽しみです。

INORAN

ロックバンドLUNA SEAのギタリストとして92年にメジャーデビュー。97年よりソロ活動をスタートさせ、Muddy Apes、Tourbillonなどでも精力的な活動を展開。
<http://inoran.org>

#UnlimitedExpression

田渕ひさ子

NUMBER GIRL / toddle

Photograph by Yuuki Igarashi

#UnlimitedExpression
Hisako Tabuchi



ソロでライブをしたり、家でDTMをする人も これ1本あればさまざまな サウンドが出せるので重宝すると思う

——American Acoustasonic Jazzmasterを弾いてみるのインプレッションをお聞かせください。

田渕 自分が持ち慣れたJazzmasterの形なので、やはりすごく好きでした。以前、American Acoustasonic Telecasterを弾かせてもらったのですが、こちらはJazzmasterっぽい、温かい中音域がちゃんと再現されていて良いですね。ピックアップもハムバッカーが搭載されていて、その音が最高でした。弾いていて、本当に気持ちの良いサウンドです。

——ご自宅でもAmerican Acoustasonic Jazzmasterを弾いていますか？

田渕 常に膝に乗せています(笑)。“よし、弾くぞ”と気合いを入れるまでもなく、気づけば手に取ってしまうというか。例えば、家でアンプをつながらずにエレキを弾くと“エレキの生音”という感じじゃないですか。でもAmerican Acoustasonic Jazzmasterだと、生音だけでちゃんと良い音がするので、弾いていてとても気分がいいんです。

——アコギほど音量も大きくないですし。

田渕 そうそう。アルペジオなら夜中でも弾ける。それに、アコギはやっぱりボディが大きいから抱えるのが大変なんですよ(笑)。

——American Acoustasonic Jazzmasterには、アコースティックトーンとエレクトリックトーンで構成される5種類の異なるトーンセットが用意されていて、セレクターのポジションの切り替え、MODノブの操作によってさまざまなサウンドの組み合わせが楽しめます。

田渕 どの組み合わせも良い音なのですが、個人的には5-A (Rosewood Dreadnought)と4-B (All-Mahogany Small Body) が気に入りました。あと、2-B (Lo-Fi Piezo Crunch) がすごく良かったです(笑)。確かにローファイかつユニークなサウンドですが、コード弾きをするときすごく気持ちよくて、Jazzmasterならではの！という感じがしましたね。

——American Acoustasonic Jazzmasterを、どんな人にオススメしますか？

田渕 バンドの中で、アコギとエレキを違和感なく切り替えられるので、そういうサウンドを求めている人にももちろんオススメですが、ソロでライブをされていたり、家でDTMなどをやったりする人も、これ1本あればさまざまなサウンドが出せるので重宝すると思いますよ。

たぶち ひさこ
75年、福岡県出身。13歳からギターを始め、19歳でNUMBER GIRLに加入。
今や日本のロックシーンを代表する女性ギタリストの一人。
<https://hisakotabuchi.tumblr.com>

#CoverArtist

北村匠海／矢部昌暉

DISH//

今をときめくアーティストに、最新作について、そして愛用するフェンダーギター／ベースとの関わりをインタビューするマンスリー企画「Cover Artist」。プレイヤーとしての魅力に迫ります。



Photograph by Yuuki Igarashi

#CoverArtist
DISH//



DISH//を結成した直後にStratocasterを手に入れたんです

—フェンダーとの出会いはいつですか？

北村(写真左) 2019年にJazzmasterを手を取ったのが最初の出会いです。フォームが好き過ぎるんですよ。NUMBER GIRLをはじめ、自分が好きなアーティストが持っていたものもあるんですけど、独特のサウンドがあるじゃないですか。カリッとでもゴリッとでもなく、ゴン！ってくる感じ…わかりますかね(笑)？ そのサウンドがDISH//に合うかどうかはよくわからなかったのですが、とにかく好きな音だったので手に取りました。

—実際にバンドの中で弾いてみてどうでしたか？

北村 僕は今、マッチレスのアンプを使っているのですが、Jazzmasterとの相性がすごく良くて、DISH//のレパートリーの中では、例えばカッティングが印象的な曲だともすごく真価を発揮してくれますね。Jazzmasterのサウンドを、DISH//の中に取り込めるのが楽しくて仕方がないです。

—矢部さんはどうですか？

矢部(写真右) 実は僕、DISH//を結成した直後にStratocasterを手に入れたんです。というのも、中学生の時に“幽霊部員で構わないから入ってくれ”と頼まれてギター部に所属していたことがあって(笑)。その時は別にギターを弾いていたわけでもなく、部室でただしゃべっていただけなんですけど、DISH//でギターを弾くことになって、部長に相談したらStratocasterを貸してくれて。その時はまだそれがフェンダーだということも、その価値すらもわかっていなかったんですけど(笑)。

—何だか運命的なものを感じますね。お二人にとって憧れのギタリストは？

北村 僕はTHEE MICHELLE GUN ELEPHANTのアベフトシさんです。アベさんはTelecasterでしたが、とにかくカッティングがカッコ良くて、手にコンプが搭載されているんじゃないかって思うくらい本当に安定しているんですよ(笑)。ライブ映像もめちゃくちゃ見ましたし、「世界の終わり」や「シャンテリヤ」は家でコピーしまりましたね。真似しようにも真似できないくらい、大好きで偉大なギタリストです。

矢部 僕はDISH//を始めて、まだギターをあまり好きになれずにいた時にONE OK ROCKさんのライブを観に行っ。そこで初めて、ロックバンドを“カッコいい！”と思ったんです。その時の光景が今でも忘れられないし、おそらく永遠に憧れ続ける存在だと思います。そういう意味では、Toruさんのギターが一番好きということになるかもしれないですね。

—DISH//を結成した頃のお二人のように、これからギターを始めようと思っている人にアドバイスしたら？

北村 僕はもう、ただただ好きだからギターを頑張れたんです。さっさも言ったように、まずは自分が好きな曲、弾いてみたいと思う曲にチャレンジしてみるのがいんじゃないかなと思います。いきなり運指の練習をしても、全然面白くないじゃないですか(笑)。今はネットで調べれば、楽曲のコード進行などもすぐに出てきますし、まずはそれを参考にしながら自分の大好きな曲を弾いてみるのが一番の練習方法だし、長続きするコツなのかなと思います。

矢部 ギターは“自分を表現するツール”だと僕は思っています。例えばギターの練習をしていますが、もうダメだ、全然上達しないしギターなんてやめちゃおうかなと思ったなら、その感情をそのままギターにぶつけてみるのも音楽なのかなと思うんですよ。譜面通りに上手に演奏することだけが“ギターの表現”ではないと思うんです。まずは自分がその時に抱えている感情を、下手でもいいからそのまま演奏に落とし込むことから始めてみてはいいかなと思います。

ディッシュ
演奏しながら歌って踊る4人組ダンスロックバンド、新曲「No.1」配信中。
<https://dish-web.com>

#CoverArtist

くっきー!

Fenderの音が一番カッコいいんじゃないですか？

—最初に買ったフェンダーのギターは？
くっきー! いっちゃん最初に買ったんはTelecasterです。それはネットで買ったんですけど、Bベンダーがついているやつです。

—Telecasterは誰のルーツなんですか？

くっきー! バンクバンドが好きなんで、サ・クラッシュです。ジョニー・ストラマー・犬先生がつつこうではあったんで、かと言って、ジョニー・ストラマーと同じカラーにはちゃんじゃやないかなってこういうことでサンバーストなんですけど。

—Jazzmasterは？

くっきー! ジャズマズは、ただただ形がカッコウなってずっと思ってたんですけど、でも、ジャズマズってちょっと手届かんぐらい高いじゃないですか。ほんで嫌に土下座9発。「ハッ」「ハッ」「ハッ」と時間差土下座(笑)。で、「じゃあいいわよ」って。

—ギターのためなら土下座もすると(笑)。くっきー!さんの中でフェンダーってどんな存在ですか？

くっきー! フェンダーはね、ちよっと敷居が高いというか、あの程度上手くないと買ったらあかんもんな。みたいな。

—乗りこなすのは簡単じゃないか。

くっきー! そうなんですわ。バンク好きやから、どっちか言うけどゴズン垂み系が多かったんすよ。若い頃って、垂みでテクニックを誤魔化すというか(笑)。馬鹿みたいにディレイ・ジョン上げとったらええわ!みたいな感じやったんですけど、それから徐々にギターをちゃんと弾くようになって、何となくロとも楽しくなってきた頃に、ちよっとクリアなトーンが欲しくなったらやっぱりフェンダーのほうにいきますわね。

—シングルコイルのクリーントーンでアルペジオとか、味のあるギターソロを弾きたくなるとフェンダーにいきたくないと。

くっきー! そして、オーバードライブをうっすらかけてジャーリン!と削りたいな。やっぱいいいっすよな。フェンダーの音が一番カッコいいんじゃないですか? 他のメーカーさんには申し訳ないですけど。

—ジュニーハイ(川谷絵音・小藪千豊、くっきー!、中嶋イッキュウ、新理雄)からなるバンド)ではベースを弾いていますが、ベースは何をお持ちですか？

くっきー! Precision BassとJazz Bassが2本あります。もちろんフェンダーですわ。ジュニーハイの時はフレベですわね。アマプロ(American Professional)でネズミ色のやつですわ。

#CoverArtist

牧達弥／柳沢進太郎／長谷川プリティ敬祐

go!go!vanillas

自分が聴いてきたほとんどの音楽に、Fenderの楽器が必ず入っている

—皆さんが楽器を始めたきっかけを教えてくださいませんか?
牧(写真中央) プリティは僕は中学校から一緒なんですけど、当時クラサイトで共通の友人がギターをやりに始めて、そいつの家に遊びに行く、セックス・ピストルズやニルヴァーナのコピーをよくやっていました。当時、そういう音楽を聴いている友人は周りに誰もいなかったのですごく新鮮だったし、「ギターを弾けるってカッコいいな」と思っていました。そのうちに彼がバンドを組んで、ステージで弾いている姿を見たら、「まるで魔法を使っているみたいだな」とさらに衝撃を受けて、それで俺もプリティもバンドがやりたくって、2人でギターを買ったのがそもそものきっかけです。

プリティ(写真左) なので、僕も最初はギターだったんですけど、ベースをやることになったのは、牧と上京してバンドをやろうという話になって、ベースがないからベースに回ったというのがそもそものきっかけでした。

柳沢(写真右) 僕は、親の代からドラムをやっている幼稚園児から、中学校に上がった時に「バンドやろうよ」と言われて、親にねだってギターを買ってもらったのが最初でしたね。それまでは普通にテレビで流れる歌謡曲を聴いて育ってきたんですけど、その幼馴染みからビストルズを聴かされて、「こんな荒っぽい演奏でもいいんだ!」と驚いたことを覚えています。

—フェンダーとの出会いを教えてくださいませんか?
牧 フェンダーに出会うまでは、高2の時に買った某メーカーのテレキャスタップを使っていました。その頃から、フェンダーに対する憧れがずっとあったんですけど、で、go!go!vanillasのメジャー・アルバム「ババリンガール」のレコーディングの時に、初めてフェンダー「Stratocaster」を購入して、その半年後にツアー用としてTelecasterを手に入れました。さらにそのタイミングでアップもTwin Reverbを導入して、THE BAWDIESのTAXMANさんからSuper-Sonicも借りていたから、一気にフェンダー尽くしになりましたね。

プリティ 僕は、最初に購入したベースがそれこそフレベだったんですけど、というのも、フラーカンパニーのグレートマニアワさんのベースがものすごく好きで、彼が60年代のレベルを使用しているのと知ったからなんです。ただ19歳の頃は、60年代のベースはとても手が出なくて。楽器屋の店員さんに「予算内で、できる限り近い音が出るベースはありますか?」と相談して、探してもらったのが74年製のフレベでした。

Photograph by Hirohisa Nakano

#CoverArtist
COOKIE!



—実はStratocasterとしっかり向き合うのは今回が初めてで。そう。

くっきー! 初です。—なぜ今までStratocasterを弾いてこなかったのですか?

くっきー! ストラトは上手い人しか持ったらあかん、「王様ギター」みたいなイメージで、裏キングという感じでして、グレッチの派手な「王様」じゃなくて、仔んだ王というか。どっちか言うと社長というよりは会長みたいな(笑)。なかなか手が出にくいっすよな。ほんま下手な人が持つもんじゃないというかね。なんかこうゾウゾウとしますよな。上手い人ってほしいストロト持たせません?

—エリック・クラプトン、ジェフ・ペック、ジミ・ヘンドリックス…誰かにストロト弾きって名プレイヤーが多いですよな。

くっきー! ええ、テクニクがすごい人ってみんなストロトを

持っている気がするんですよ。

—改めてギターの魅力を言葉にすると?

くっきー! どっちかわかんというか、オスとするのか、メスとするのか。かわいいねやけど、カッコいいわっていう。女子やけどカッコいいみたいないな。人で聞るとGAOさんみたいな。



—最後に、これからギターを始める人やビキナーにアドバイスをお願いします。

くっきー! 今はコロナで僕自身、テクニク向上タイムというかね、エリック・クラプトンの「アイアーズ・イン・ヘヴン」を弾きだすよなことになるんで(笑)。コロナの間は視野を広げ必ずテクニク向上タイムじゃないですか? だから、コロナ明けたら新たなギタリストになるんじゃないかなと思いますし、そう思って頑張ります!

くっきー!

76年生まれ、日本のお笑い芸人。よしもとクリエイティブ・エージェンシー所属。94年4月、ロンドンとお笑いコンビ「野性爆弾」を結成。

#CoverArtist

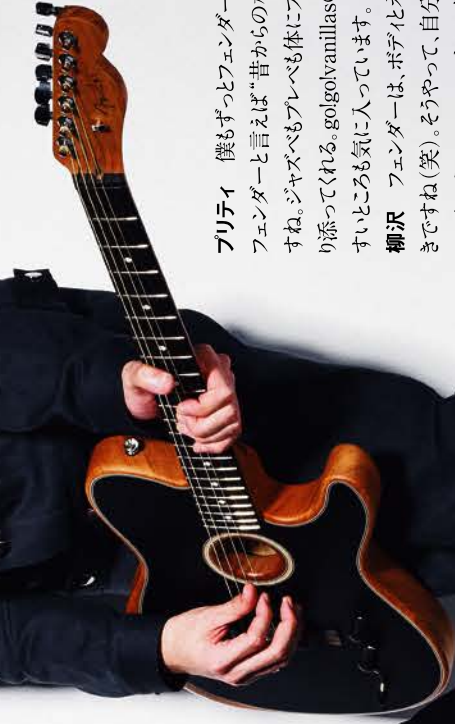
Photograph by Taichi Nishimaki

#CoverArtist
go!go!vanillas



柳沢 僕は、中3の時に最初に買ったのがAmerican StandardシリーズでキャンディアップアルレルドのTelecasterでした。例えば、プロック・ハーターのラッセル・リキックや、レディ・ヘットのジョニー・グリーナーのように、Telecasterを弾くUKバンドのギタリストに当時すごく憧れていたんです。で、いつかはグレイチーのテレキャスが欲しいなと思って、数年後に同じくキャンディアップアルレルドの66年モデルのテレキャスを購入しました。最高じゃないかな。

牧 やっぱ、フェンダーってワールドスタンダードですよな。ロックだけじゃなくポップスも含め、自分が聴いてきたほとんどの音楽に、何かしらフェンダーの楽器が必ずと言っていいくらい入っている。



プリティ 僕もずっとフェンダーのベースを使っているから、フェンダーと言えば「昔からの相棒」というイメージがありますね。ジャズでもフレベも体にフィットすると思うか、自分に寄り添ってくれる。go!go!vanillasの、どんな楽曲にも合わせやすいところも気に入っています。

柳沢 フェンダーは、ホデ化ネットを切り離せるところも好きですな(笑)。そうやって、自分でカスタマイズして使ってもいいし、レオ・フエンダーの概念が、とても素晴らしいと思います。

コー・バーノラス

2014年、マジック・ナンバー1stアルバム「Magic Number」リリース。

<https://go!go!vanillas.com>



#CoverArtist

TENDRE

Fenderは音色を探すのが楽しい楽器

——TENDREさんはマルチプレイヤーですが、ベーストとして注目されるケースも多いです。ベースを始めたきっかけは？

TENDRE 高校生の時に初めてバンドを組んだんです。それは吹奏楽部と並行して、バンドを始めたきっかけは、高校に入ってすぐ仲良くなった友人が“バンドをやらうぜ”と誘ってくれたから。その友人はドラムをやるといことだったので、僕は父がベースistで、そこまでベースを触る機会もなかったのですが、何か弾けるだろうと思ってベースにしたんです。

——フェンダーを触るようになったのはいつですか？

TENDRE うちの父が生徒さんにベースを教えているんです。その生徒さんが置いていった、もう使われていないベースが実家にある。それがたまたま、フェンダーの90年代ぐらいの真っ白の誰かのシグネチャーモデルのPJ Bassで。父が“生徒さんはもう使わないし弾いていいんじゃない？”って。さすがに、自分のベースは使わせまいと思っていたのかもかもしれない(笑)。そこでたまたま触らせてもらったのが最初のフェンダーですね。プレベってどちらかに振り切るわけではなく、絶妙な音色を探すのに適していて、自然と音の探究心を培ったのかもかもしれません。“音色を探すのが楽しい楽器”という印象から入ったのがフェンダーです。

——最近もAmerican UltraシリーズのPrecision Bassを使っていますか？

TENDRE はい、なので原点復帰みたいなところもあります。そのAmerican Ultraを2020年のアルバム「LIFE LESS LONELY」では多用しました。時期ごとのモードがあって、去年はAmerican Ultraで多くの曲を成り立たせたせいで、今年はギラッとしたJazz Bassの音がほしいなと思っています。音楽性って輪廻転生じゃないですけど、回り回っていくものだと思うので。American Ultraは使い勝手が良かったとか、自分もともと使っていたタイプからグレードがアップしていて、一個一個のパーツのクオリティが上がって使いやすくなって、自分の今の肌合っているなと思って使っていました。

——ギターも普段から弾いていますか？

TENDRE 2021年はギターを弾く機会が多いですね。それこそフェンダーの企画の映像で、American Acoustasonic Stratocasterを弾かせてもらいました。去年は特に海外のシーンを見ても、わりとギターサウンドが多くて、“人間味があっていいな、ギター”みたいなことをすごく思っていて。最近はわりとギターの音の探求をしています。

——今回は、American Acoustasonic Jazzmasterを試奏していただきました。

TENDRE ボディがちゃんとJazzmasterならではの重みがあって、それが音にもよく現れていますね。Acoustasonicってある種、抽象的で、そこにすごく惹かれるんです。PJ Bassもそうですが、音を無限大に探究できる。ちょっとしたブレンドの塩梅で、その人のキャラクターみたいなものが出てくるだろうし。その中で、今回のJazzmasterモデルに関しては、ひとつ歪みの要素が強くなった印象がありますが、音楽性の幅がより広がるギターになった印象もあります。それこそ、ギターの音を探究している最中の自分にとっては、すごく願ったり叶ったりのギターですね。これ1本で何でもこなせるぐらいの素質がある。そういう意味では、ギターを始める人が触っているいろいろな音を探すこともできるし、どこかのステージに持って行ってもちゃんと格好がつくだろうし。このAmerican Acoustasonic Jazzmasterでシリーズ3本目ですが、本当にフェンダーらしい、だけど、時代の音楽作りにもフォーカスが当たったような、いいクリエーションだなと弾いていて思いました。

テンドー
88年生まれ。2017年より、河原太郎のソロプロジェクト「TENDRE」(テンドー)を始動。http://tendre-jpn.com

Photograph by Shuya Nakano

#CoverArtist
TENDRE



#SpecialInterview

MIYAVI

シグネチャーモデル“MIYAVI Telecaster”は、FENDER CUSTOM SHOP製のオリジナルモデルをMIYAVI本人監修のもと忠実に再現。理想のサウンドに対するこだわりを聞いた。

Photograph by Hirohisa Nakano

#SpecialInterview
MIYAVI



世界のどこへ行っても これ1本で戦いたかった

——特徴としてはまず、ピックアッププレートと一体型でありながらアーミングを可能にした“MAVERICK SUPER VEE”レモシステム”が搭載されています。

MIYAVI このレモアームを駆使すれば、歌うようなギターソロが弾ける。今の僕にとって、なくてはならない存在です。以前、テリー・ルイス(ジャム&ルイス)と仕事をした時に、“MIYAVI, Melody is the king.(メロディこそが王様なんだよ)”と言われたことがあって。その時は全然意味がわからず、“Oh,cool.(あつそ)”と言ってスラップばかりやっていたんですけど(笑)、やり続けるうちに意味がわかってきた。リズムは時代を作るけれど、メロディは時代を超えて人の心に残る。自分もギターでメロディを生み出したいと思って、この仕様と辿り着いたんです。

——サステイナーピックアップをフロントに、American Vintage 65 Stratocasterシングルコイルをセンターに、Duncan Little 59ハムバッカーをリアに採用した3ピックアップ構成になっています。

MIYAVI “やりたい”と思うことが、がむしゃらにどんどん足していったから、ぶっちゃけ節操ないと思います(笑)。ギターとしての型を保っているギリギリの改造というか。欲張りと言えば欲張りなギターだけど、なぜそこまで欲張ったか?という、シンプル、ミニマルで良かったから。世界のどこに行っても“これ1本で戦いたかったから”なんです。世界中をこれ1本で渡り歩きたい。いつ、どんな現場へ行っても、このギターとペダルボードだけで自分にかかせない音を出して勝負できるようにしたかったんですね。

——今回のシグネチャーモデルには、そんなカスタムショップ製のオリジナルの意志がかなり忠実に受け継がれていると。

MIYAVI もちろん、改造した本人が開発に立ち会っていますからね(笑)。誰も聴いたことのない音を出せるギターになったんじゃないかな。いわゆる普通のTelecasterとは違うものだと思う。逆に言えば、普通のTelecasterではできないことがたくさんできる。アーミングもそうだし、Stratocasterにはないジャキジャキ感もあって、かと思えばメロディックなトーンも出せる。サステイナーもついているし、面白い使い方がいくつでもできるので、逆に、ここからどんどん改造してほしい。僕が思いつかないような奏法をどんどん試してほしいです。

ミヤビ
2002年よりソロ名義で活動を開始。2004年10月にメジャーデビュー。
http://myv382tokyo.com



#TheOneForAll.

TOKIE

フェンダーが2020年秋に発表した最新シリーズ“American Professional II”。
本シリーズのコンセプトである“THE ONE. FOR ALL.”をテーマに、“ギターとベースを愛するすべての人に”をテーマに、
日本を代表するアーティストにこれまでの積み重ねのビジョンを聞く。

Photograph by Hajime Onba

#TheOneForAll.
TOKIE



これからは、つまらないこだわりを捨てていかなきゃなと思っています

——TOKIEさんの中でプロミュージシャンとしての転職を挙げるとすると?

TOKIE 転職はRIZEとAJICOへの加入ですね。それでガラリと活動が変わりました。それ以前もサポーターのお仕事はやっていたのですが、いろいろなところからお仕事をいただくようになったのは、その2つのバンドに加入した2000年以降ですね。——確かにそこから、TOKIEさんはバンドマンというよりもセッションプレイヤーのイメージが強いように思えます。

TOKIE 固定のメンバーでやるのも楽しいし、お誘いいただいたらもちろん一緒に音を出してみたいという欲求もあるんで、そこはバランスを取りつつどちらもやりたいなと思っています。

——バンドもサポーターも両方やることで、ベージストとしての欲求が満たされる?

TOKIE そうですね。固定のメンバーとやる時と、誘われてセッションだったりサポーターのお仕事をする時ではベートルが全然違うので、それはどちらも捨てがたいというか、どちらかを辞めてこれだけにする、という選択は私の中ではないですね。

——ベートルが全然違うというのは?

TOKIE 自分がやりたいこと、表現したいことをそのままやるというベートルと、誘っていただいたセッ

楽を奏でる意味が、ただ音楽が好きで奏でているっていう次元じゃないところにある。いろいろなミュージシャンに会いますが、やっぱりスカバラのメンバーはみんなすごいなと思います。プロミュージシャンとしての原点はスカバラですね。

——加藤さんのプロフェッショナルとしてのこだわりは?

加藤 スカバラの中に自分のギタースタイルをどう選んでいくか、どう新しいスカバラにしていくなをずっと模索し続けていて、今までの最中だと思っています。ギタリストとしては、スカという音楽に対してギターができる役割を、スカバンドとして確実に更新したいなと思っているんです。もともとギターがスカで覆れ回れる、スカバンドを見てギタリストになりたいと憧れられるような、そういう存在感を示せないかなと絶えず思っています。

——加藤さんにとってギターとは?

加藤 ギターを弾いているから、いろいろな人に出会えるんですね。メキシコの片田舎に行ったりすると思うんです。“もしあの少年がギターを始めたら、将来、コーチェラ(フェスティバル)に出るかもしれない”って、ギターとの出会いと人の出会い、いろいろな景色を見させてもらっています。人と人をつなげてくれるものですね、ギターは。

かとうたかし
東京スカパラダイスオーケストラのギタリスト。
https://www.tokieska.net

#TheOneForAll.

加藤隆志

東京スカパラダイスオーケストラ

Photograph by Shuya Nakano



#TheOneForAll.
Takashi Kato



ションであれば音の化学反応、サポーターであれば誘っていただいた方に喜んでもらえるようにどう弾けばいいのかな?と考えるながら弾いたりするので、全然違うベクトルなんです。

——なるほど。自分がやりたいこと、相手のリクエストに応えるフレイの引き出しを日々どうやって磨いていますか?

TOKIE 日々のこと言うよりは、これまで自分がやっていたことです。つまり、自分のやってきたバンド活動や、これまでにお仕事でやってきたジャンル、今までやってきたことすべてが、今、そしてこれから何かをやる時に引き出しの中に溜まっている感じなんです。私自身があまりジャンルにこだわりがないんです。

——プロとしてのTOKIEさんのこだわりを挙げるとすると?

TOKIE もう、こだわりはないですね。こだわらないほうがいいなと思います。これからは、つまらないこだわりを捨てていかなきゃなと思っています。

——なるほど。では最後の質問ですが、TOKIEさんにとってベージストとは?

TOKIE 生涯の伴侶、ですね。

トキエ
97年、JESSE (Vo.Gt)、金子アツキ(Dr)と6L7RIZEを結成。
その後、AJICO、LOSALDOS、unlike、AGE OF SPADES、
THE LIPSMAXなどで活躍。
https://www.tokieofficial.com

**スカバンドを思う
ギタリストになりたいと憧れられる
ような存在感を示したい**

——プロとしてのターニングポイントを挙げるとすると?

加藤 地元・鳥取の友達と組んだ“lost CANDI”というロックバンドをやったりから、1人でギターの仕事をしていた時期があったんです。その時に、スカバラの川上(つよし)さんと出会った青木(達之)さんのお2人がプロデュースしている、シンガーソングライターの高橋徹也くんのパツクサポーターをやることになって、スカバラと知り合ったのが大きなターニングポイントですね。そのあとにサポーターの話がきて、初めて一緒に音を出したのですが衝撃を受けました。

——スカバラから感じたプロフェッショナルとは?

加藤 一番大きかったのは99年です。青木さんが亡くなった年のツアーで、僕もサポーターで参加する予定だったんです。春のツアーの2-3週間前に青木さんが亡くなって…僕はその時このツアーはキャンセルだな”と勝手に思っていたんです。でも、誰一人としてツアーを止めようと言わなかった。ドラムがなくても、リズム・マシーンでもやろうみたいな話をしていた。”何だこのバンドは!”と、バンドの絆と音

#TheOneForAll.

牛丸ありさ

yonige

Photograph by Shuya Nakano



#TheOneForAll.
Arisa Ushimaru

ただ消費されるだけの音楽にならないためにどうしたらいいのか?を考えるようになった

—プロミュージシャンとしてのターニングポイントを挙げると思うと?

牛丸 メジャーデビューするまでは感覚でしか曲作りをしていなかったんです。メジャーデビューからはスタジオミュージシャンがセッションで、取材やツアーをこなしながら曲作りする時期があったのですが、そこがターニングポイントになりました。メジャーデビュー後にいろいろと考え直して、音楽に対する向き合い方を変えました。

—ビジョンを持たないと音楽業界をサバイブすることができないと。

牛丸 そうです。ただ消費されるだけの音楽になることに気づいて、それから消費されないようにするためにどうしたらいいのか?というのを考えるようになった。最初は面白半分で「アポカド」とかを作っていたのですが、だんだんと「アポカド」みたいな曲がウケるんだってことに気づいて、それに寄らない曲を作るのが怖くなっていったんです。今は誰にも聴かれなくてもいいから、自分が面白いと思う曲を作るという方向に変えました。曲作りをしている時、自分が一番楽しかったし、私が一番好きなアルバムになったので。

—マイルドが変わって、ギターやギタープレイに

対する考える方も変わりましたか?

牛丸 メジャーデビューまではずっとレスポールだったのですが、頑固な部分はいらないやと思って、可能性を広げるためにStratocasterも使うようになった。やっぱり音の幅が広がりましたね。正解でした。ある意味、ここからギターです。

—プロとしてのこだわりや哲学はありますか?

牛丸 自分が一番楽しむことが、何よりも大事だと思って心から思います。若い子で売れてからじゃないと好きなことができない”と言っている子がいて、その考えは危ないよって思います。売れる前に言いなりになっちゃったら、売れてからも言いなりだよって。

—牛丸さんは最初からギターを弾けるほうでしたか?

牛丸 まったく弾けなかったです。当時から練習が嫌いだっただから、上達するのがかなり遅かったですし、Fコードを弾くに3年くらいかかりました。ギターを途中でやめちゃう人って、最初のハードルの設定が高いからだと思います。だから、自分の好きなコードとか簡単なコードだけを弾いていければいいと思います。私は、Fを弾かずに3年間好きな曲を弾いていたので、「Fがなくてもギターは弾けるの」と思っていました。自分が好きな曲だけを弾けばいいと思います。

丸まる ありさ
yonigeのギター&ギター、2013年撮影。
<https://yonige.net>

#TheOneForAll.

TOMOMI

SCANDAL

Photograph by Shuya Nakano



#TheOneForAll.
TOMOMI

ガールズバンドとして胸を張っていたいなと思っています

—海外での活動も積極的に行っているSCANDALですが、「日本のバンド」という自負はありますか?

TOMOMI 日本発のバンドというよりは、ガールズバンドとして胸を張っていたいなと思っています。世界的にもガールズバンドって、生まれては消えていくことが多いんですよね。そんな中、15年間続けたことには自信を持ちたいです。

—プロとしてのターニングポイントを挙げると思うと?

TOMOMI テレビで、その番組の箱パンクみたいな形でガストのバックバンドをやらせてもらう機会があったのですが、その時はものすごくビビりましたね。自分のミスで演奏をストップさせるなんてありません。そういう環境に置かせてもらった時に、これがプロフェッショナルな現場だなと感じました。

—今、プロフェッショナルとして大切にしていることは?

TOMOMI 中高生たちの、楽器の入り口になっているという自負はあります。“ちょっと楽器をやってみたい”という子たちが初めてコピーする曲に、SCANDALの楽曲を選んでもらうことが多くて、それはすごく嬉しいです。自分たちも高校生の頃にコピーした曲のことはすっかりと忘れなし、一生好きな

曲になっているんですね。誰かにとって、そういうバンドであるというよりは、今後大切にしていきたいと思っています。

—フエンターのベースにはどんな思い出がありますか?

TOMOMI ダンススクールの先生に譲り受けたのが最初の出会いです。それまでは初心者キップみたいなものを買って、ストリートライブをやっていたのですが、“ちゃんとしたベースを持ってみたい?”と言われてその先生に貸してもらったんですよ。それでずっとライブもやっていたんですけど、上京するタイミングで返そうとしたら、いや、それはお前のベースだよ”って言うてくれて。今でも週一のバンドリハーサルでは、必ずそのベースを持って行きます。

—これからベースを始める方へメッセージをお願いします。

TOMOMI 今はベースの弾き方を解説する教則動画や、弾いてみた”動画などがたくさん上がっているじゃないですか。それをお手本に、どんな新しいことにチャレンジしていくのかがいいと思います。“カゴコいっ!”と考えるスタイルがいっぱい見つかるとはすだから、好きな曲、好きなフレーズ、好きなベースプレイや、そういうったものをたくさん増やしていくことが上達の近道なのかな。

トモミ
SCANDALのベース&ギター、2006年撮影。
<https://www.scandal4.com>





田中和将 GRAPEVINE

工藤晴香

ナカシマ おいしくメロンパン

はっとり マカロニえんぴつ



たなか かずまさ
GRAPEVINEのヴォーカル&ギター。作詞も手がける。2021年5月26日にニューアルバム「新しい果実」をリリース。
<https://www.grapevineonline.jp>

くどう はるか
2005年、テレビアニメ「ハチミツとクローバー」の花本はぐみ役で声優デビュー。
その後、多くのアニメ・ゲームに出演。2020年3月、ソロメジャーデビュー。
<https://kdharoom.com>

なかしま
94年10月16日生まれ、福岡県出身。2015年結成の3ピースロックバンド“おいしくメロンパン”のヴォーカル&ギター。
<http://oisiclemelonpan.com>

はっとり
2012年に結成された、メンバー全員が音大出身の次世代ロックバンド“マカロニえんぴつ”のヴォーカル&ギター。
<http://macaroniemptsu.com>

#MustangMicro



「ギターを弾きたい」という気持ちは、どこからでも湧いてくるものです。しかし、いつも巨大なアンプを使って音を出せる環境にあるとは限りません。外出先や、深夜の自宅など、大きな音が出せない環境だったとしても、Mustang Microがあれば、いつでも自分のサウンドシステムを使って演奏を楽しむことができます。世界中で評価の高いMustangシリーズのアンプから生まれたMustang Microは、'65 Twinをはじめとした12種類のアンプと、オーバードライブやディレイなどを含む12種類のエフェクト、5種類のEQを搭載しています。使い方もとても簡単で、ギターに直接プラグインし、お気に入りの有線ヘッドフォンを接続、そして最適なアンプとエフェクトを選ぶだけです。外部アンプやスマートフォン、PCに接続したコードなどに煩わされることなく、簡単に幅広いトーンにアクセスが可能で、気になるレイテンシー（音の遅延）もなく、レスポンスの良いタッチ&フィールで演奏することができます。

また、Mustang MicroはBluetoothオーディオに対応しているので、スマートフォンやタブレット、コンピューターとBluetooth接続することで、お気に入りの曲を流しながら、それに合わせて練習することもできます。270度回転する入力プラグは、ほとんどのギターやベースに対応し、各コントロールにも簡単にアクセス可能です。充電式のリチウムイオンバッテリー（USB-Type Cで簡単に充電可能）は、何時間もの連続演奏ができるので、「弾きたい!」と思ったタイミングを逃すこともないでしょう。

そう、Mustang Microを側に置いておけば、いつでも準備は万端です。



MUSTANG™ MICRO

人気のMustang™アンプシリーズの豊富なプリセットトーンをフィーチャーした、場所を選ばないポケットサイズの超小型アンプ。簡単に素晴らしいトーンを得ることができ、おうち時間の合間でも、外出先でも幅広く活躍します。価格:12,100 円(税込)

#MeetsMustangMicro

山岸竜之介

Photograph by Yuuki Igarashi

#MeetsMustangMicro
Ryunosuke Yamagishi



Mustang Microはまさにアンプを通した音が出るデジタルアンプはすごいところまで来た

12種類のアンプ、12種類のエフェクト、5種類のEQを備え、シンプルながらもハイクオリティなサウンドを可能にするヘッドフォンアンプ“Mustang Micro”。多彩なジャンルに対応できるこのモデルについて、山岸竜之介に使用してみたの感想を聞いた。

「まず、アンプの音がいいというのが第一印象です。夜中に部屋でアンプを鳴らせないのはギタリストとして誰もが悩むことだと思いますけど、Mustang Microだと時間帯を気にしないで済むし、移動先のホテルの部屋でもイヤホンで聴きながら演奏できる。もうひとつ、エレキのチョーキングとかカッティングって、アンプの音を想像して弾くと上達するんですけど、これはまさにアンプを通した音が出ますね。デジタルアンプはすごいところまで来たなと思いました」

「家で弾く時にパッとスイッチをつけるだけで弾ける。ベッドの横に置いて寝る前の15分ぐらいでも弾ける。けど、イヤホンして弾いていたら時間を忘れるんですよ、要注意なぐらい(笑)。コーラスをかけてアルペジオ弾いていたら、あれ、もう1時間経ってた、みたいなことが絶対にあると思う。良い音すぎて注意(笑)」



「プロ、アマ、初心者、上級者関係なく、弾いて楽しいと思える道具が増えるのはいいことだと思います。練習だけでなく、何か弾いてみたいと思った時にいい音で聴こえる環境があるわけですから。外出先のホテルとか新幹線の中でオケを作り、ホテルの部屋でそのトラックに合わせてギターを練習することが可能になる。ライブの前日入りした時にホテルの部屋で弾くとか、リハと本番の間に弾けたりする。どの世代でも楽しめて、かつノイズのストレスなしでギターを弾けるといえるのは、今のコロナ禍を超えて外出が増えると重宝すると思います」

やまきりゆうのすけ
幼稚園年長の頃、「さんまのスーパーからくりTV」にてCharとギターセッションをし、一躍注目の存在となる。10代にして、音楽の聖地であるBlue NoteやBillboardでバンドとして単独ライブも果たした。また、ギタリストとして数々のミュージシャンとコラボレーションしている。https://ryunosuke-gt.com

アーティストとフェンダーによるケミストリーを、写真で切り取るエキシビジョンシリーズ「THE ROCK FREAKS」。アーティストとギターの、知られざる関係に迫る。

Photograph by Yuuki Igarashi

#TheRockFreaks
Ryuichi Kawamura



答え合わせをしてみた結果 世界基準の音として Fenderに辿り着いた

LUNA SEAのヴォーカリストであり、ソロとしても活躍する河村隆一。圧倒的な声量を武器に、2011年には日本武道館にて、6時間半で104曲を歌いきるコンサートでギネスワールドレコーズに認定されたり、〈ノーマイク・ノースピーカーズコンサート〉を行うなど、ヴォーカリストとしての実力はアジアの中でも群を抜いている。

そんな河村だが、LUNA SEAのライブでも時折ギターを弾きながら歌うこともあるし、そもそもソロ活動においては作曲も担当している。LUNA SEAのライブでギターを弾く理由を尋ねると「SUGIZOが弾いて言うので」と笑いながら教えてくれたが、インタビューが進むにつれて実はかなりの楽器マニアであることが判明していく。

「もともと家に親戚のアコギがあったのと、母親がザビートルズのファンで、エレキギターの音は耳に聞いて憧れていたんです。小学校5年生の時に、初めて白いエレキギターを買ったのがギターデビューですね。何かをコピーするのではなく、自分でルールを作ればいいんだと思って、中学校2年生の時にバンドを組んでオリジナル曲を作るようになりました」
その流れが、のちにLUNA SEAへの道を切り開いていくことになる。実は彼のプライベートスタジオには、ヴィンテージの機材と楽器が揃っている。ただし、コレクターではない。あくまでもレコーディングで使うものだけを置いておくそうだ。スタジオに置いてある、河村の音楽の世界観を支えるギターとベースはフェンダーがメインだという。

感覚的に“太い音”は理解できても、“太い音”にも実はいろいろある。音ほど言葉にするのが難しいものはない。それから彼は、世界基準となっているロック、ポップスを聴き、その音を支える楽器をくまなく調べ、“基準となる音”を探し求めた。

「その答え合わせをしてみた結果、世界基準の音としてフェンダーに辿り着いたんです」

インタビューが終わったあと、河村はフェンダーのショールームにあるたくさんのギターを愛おしそうに眺めてこう言った。

「このギターたちは200年後、どんな音を出すのでしょうか。200年後というと随分と先だけど、僕は良い音を出しているほうに賭けますね」と優しく微笑んだ。河村隆一というアーティストは常に未来を見つめ、そして好奇心に溢れているが、その源流はギターにあるのかも知れない。

かわむら りゅういち
LUNA SEAのヴォーカリスト、89年結成。
https://www.lunasea.jp

#Information

FENDER NEXT

フェンダーは70年以上に渡り、ギター界を牽引するミュージシャンたちを支えてきました。2019年に始まった「FENDER NEXT」は、世界中の次世代アーティストを全面的にサポートするプログラムです。その第3期となる2021年、世界中のアーティストとともに日本からは、マルチプレイヤー/プロデューサーとして独特の存在感を放つ「TENDRE (テンダー)」、繊細ながらも力強いサウンドが特徴のオルタナティブロックバンド「羊文学」、そして、高い技術に裏付けられた即興性の高いスリリングな演奏を聴かせる「Suspended 4th」の3組が選出されました。ぜひ今後の「FENDER NEXT」アーティストの活躍をご期待ください。



TENDRE



羊文学



Suspended 4th



#FENDER NEXT

フェンダー-SNSをフォローして、メッセージ入りサイン色紙を当てよう!

キャンペーン期間中に、フェンダーのSNSをフォロー&リツイート、またはコメントしてくれた方の中から抽選で、アーティストのメッセージが入ったサイン入り色紙をプレゼントします(各1名様)!
合計8組のアーティストが登場予定。応募方法は簡単なので奮ってご応募ください。



#SNS Campaign

キャンペーン期間
2021年4月6日(火)～5月31日(月)まで

応募方法
下記のフェンダーの公式SNSアカウントをフォローして、リツイートまたはコメントをするだけで完了。

Twitterの場合
@fender_officialをフォローして、希望するアーティストに関するキャンペーンポストをリツイート

Instagramの場合
@fender_jpをフォローして、希望するアーティストに関するキャンペーンポストにコメント

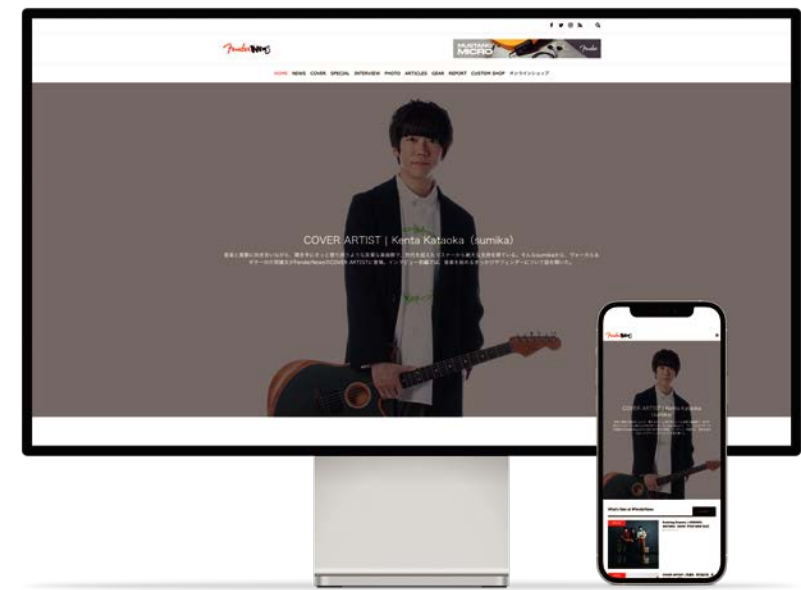
厳正なる抽選の結果、当選者にはダイレクトメッセージでご連絡いたします。アカウントが非公開になっている場合、応募は無効とさせていただきます。予めご了承ください。



What's #FenderNews

Life - Surrounded by music
#FenderNews is committed to delivering a variety of lifestyle options to all players at every stage of their musical journey. It is an online media created by Fender, designed for music lovers.

「いつも、音楽をそばに」
そんなミュージックライフスタイルを創造し、すべてのプレイヤーをサポートする。
それが、フェンダー発のオンラインメディア #FenderNews です。



2021年春、
#FenderNewsが大幅にリニューアル。
今まで以上に見やすく、そして情報が探しやすくなりました。これからもアーティストのインタビューやパフォーマンス、ピギナーに役立つHow Toなど、さらに充実したコンテンツをお届けいたします。
fendernews.jp



#FenderNews

フェンダーの公式SNSをフォローして最新情報をチェック!

公式SNSを通じて楽器をはじめ、音楽やアーティストの最新情報を随時発信しています。



@fender.jp @Fender_Official @fender_jp Fender Music Japan

#FenderNewspaper | Vol.7 Spring 2021

発行日=2021年4月28日 発行=フェンダーミュージック株式会社 〒150-0001 東京都渋谷区神宮前3-1-30 3F
配布希望・記事内容に関するお問い合わせ カスタマーサポート
Tel 0120-1946-60 [フリーダイヤル/受付時間 10:00~17:00(月~金曜日)] https://shop.fender.com/ja-JP/contact-us
本誌内の記事および写真、イラストなどの無断複製、複製、放送を禁じます。本誌で紹介している商品の金額は本体のみの価格(税込)です。
Copyright ©2021, Fender Music Corporation. All Rights Reserved. Printed in Japan.

変幻 自在の サウンド

回すほどに生まれる新しいサウンド



AMERICAN ACOUSTASONIC® JAZZMASTER®

アイコニックなアコースティックトーンと、スケール感のあるエレクトリックトーンの間を
ブレンド・ノブで縦横無尽に往き来することができる、別世界のギター登場。

Fender®

CRAFTED IN CALIFORNIA, USA